古堤街道を往く②
「『勿入渕』の変遷～古堤街道成立の前史～」

京橋から東へ寝屋川沿いに中茶屋（大阪市鶴見区）あたりまで来ると、古堤街道は一旦、中央環状線・下水処理施設により分断されますが、大東市に入ると諸福7丁目から、再び往時のルートを歩くことができます。西諸福墓地を左手に東へ進んで行くと府道鴻池新田停車場線と交差しますが、そこから30メートルほど北に「勿入渕址」の石碑が立っています。

「勿入渕」とは、かつて河内平野に存在した河内湖のことを指し、清少納言の「枕草子」にその名が見られることから、平安時代中期頃には、このように呼ばれていたようです。

また室町時代には、「広見池」と呼ばれていたことが「河内水走文書」に記されています。

中世から近世にかけて、大和川による土砂の堆積で、広見池は2つの池に分かれ、17世紀末に貝原益軒が著した「南遊紀行」には、「内助が淵は大池なり。ふかうの池の西南にあり」と、この2つの池が紹介されています。現在の大東市域にあったのが「ふかうの池」（深野池）で、その西南の東大阪市域にあったのが「勿入渕」がなまった「内助が淵」、すなわち新開池でした。

18世紀初めの大和川付け替えにより、深野・新開両池が新田となったため、これまで池や川の変動の影響を受けていた街道のルートが確定します。これ以降、古堤街道は主要な街道として発達していきました。

（生涯学習課）

「勿入渕址」碑（諸福6丁目）石碑の南側に新開池が広がっていました

深野池・新開池の立地図（大東市立歴史民俗資料館「常設展示案内」より）